

国語科における読書指導法の研究

—「読み聞かせ」を中心に—

平澤真美

一、「読み聞かせ」とは

「読み聞かせ」は、従来主に図書館教育という分野において、読書への興味づけの一方として研究・実践されてきた。一方、国語教育の分野としての研究はあまりなされておらず、「読み聞かせ」を明確に定義づけている文献は少ない。そうした中で一般に「読み聞かせ」とは、「大人が子どものために絵本や物語を読んで聞かせること。」であると考えられてきた。しかし、「大人が子どものために読んで聞かせること」が、全て「読み聞かせ」であるかどうかというと、そうではない。国語の授業における教師の範読などは、「大人が子どもに読んで聞かせる」という形ではあるが、「読み聞かせ」とはねらいや質を異にしている。では、「読み聞かせ」が成立するには、どのような条件が必要となるだろうか。

「読み聞かせ」を成立させるためには、いくつかの必

要な要素があると考えられる。まず第一に、「読み手・聞き手・本」の三者が揃わなければならない。さらに読み手には聞き手に対して、読んで聞かせようという意識が必要であり、聞き手はそれを聞こうとする態度がなければならぬ。このことについて、増村王子氏は『読み聞かせの発見』（一九七三年八月三〇日・岩崎書店刊）の中で、「読み聞かせを成り立たせるもの」として次の三つを挙げている。

① 読み手、本、聞き手の三者がそろっていること。
普通、読み手は教師であれ、地域・家庭の母親であれ、図書館員であれ、大人であること、聞き手の方は幼児から小学生ぐらいまでの個人か集団であり、子どもであること、そしてここには読み聞かせようという大人の意志と、聞こうとする子供の欲求、またその行為を起こさせる要因や動機があること。

② 読み手が、本、つまり活字化された文字や文章を

音声言語にかえて相手に読んで聞かせるという行為と、聞き手がそれを主体的に耳から聞き、両者が一つの世界を共有するということ。ここまでのどの一つが欠けても、読み聞かせは成立しない。

③ このような行為と状況を作り出す場が、一時的であれ継続的であれ必要である。それにはこのことを必要とする社会や、はたす役割、それがもたらす影響など、有形・無形の様々な様相が、これに付帯してあらわれてくることは、あらゆる読書活動の場合と同様である。

「読み聞かせ」を、通常「読書」と呼ぶ行為と比較すると、その特徴が明らかに異なる。すなわち、「読書」と「読み聞かせ」の明らかな違いは、本と子どもたちの間に介在する「読み手」の存在である。読書の場合、子どもは本に書かれた活字を自分でたどり、意味を理解していくが、「読み聞かせ」は、読み手が活字を音声化し、聞き手はその音声言語を聞いて理解することになる。つまり、「読書」は文字を視覚でとらえるが、「読み聞かせ」は聴覚によって聞き取ることになる。そうしたことから「読み聞かせ」は「耳からの読書」と言い換えることもできよう。また読書と違って、「読み聞かせ」の場合、聞き手の理解する内容に読み手の読み取り方が影響してくる。読み手が悲しそうな読み方をする、その話は聞き手に、より悲しいものとして伝わるものである。読み

手は単に文字を音声化するだけでなく、聞き手が内容を理解する際の重要な援助の働きもしていることになる。

「読み聞かせ」は、一般に読み手は大人、聞き手は子どもとされている。増村氏も述べているように、両者の間には読んであげようという意志とそれを聞こうとする態度があるべきであり、強制的ではなく両者ともに本の内容を楽しもうとすることが大切である。特に重要なのは、読み手は生身の人間であり、聞き手に読み聞かせようという意志があることである。つまり、いくら上手であっても、テープに録音されたものや、ラジオから流れてくる音声では「読み聞かせ」とは言えない。聞いてもらおうという意志なく、ただ音声化するのには、「読み聞かせ」ではなく、「音読」ということになる。

なお、読んで聞かせる本については、一冊の本として出版されているものに限らず、活字化された文字や文章と言ってよい。読み手は聞き手に対して、その本(文章)の内容を伝えることになる。

子どもにとって本を読んでもらうことは、とても楽しいことであり、興味を引かれることである。また文字を十分に読めない子どもや、文章を読み取る力が十分でない子どもも、大人に本を読んでもらうことによって、本の中の世界を知り、本を読む楽しさを体験することができ。こうした「読み聞かせ」の効果は、随分以前から注目されているものであり、取り立てて説明するまでも

ないことである。しかし、従来の読み聞かせの概念にと
られずに、そのさまざまな有効性に注目することによ
て、新しい指導の在り方や活用の仕方が見出し出せるの
ではないかと考えた。

以下「読み聞かせ」を取り上げた理由と、その活用法
について考察を加えたい。

二、「読み聞かせ」を取り上げた理由

私が読書指導法についての研究を始めたのは、「本を
読まない子どもに、本を読ませるにはどうしたらよいの
か。」という疑問を持ったからである。そして、本を読
まない子どもに、本に対して興味を持たせるための指導
方法を探っていく中で、ブックトーク、ストーリーテリ
ング、読書感想文の紹介、読書会、読み聞かせなど、さ
まざまな読書指導法があることを知った。こうした指導
法は、指導目標や指導対象となる児童の発達段階など
に応じて、いくつかに類別することができる。ただ、現時
点ではそれぞれの指導方法について、細かく研究し考察
するのは、時間的に不可能であると考え、「読み聞かせ」
のみを取り上げることとした。数多くある読書指導法の
中から、「読み聞かせ」を取り上げたのは、比較的誰に
でも実践しやすく、子どもたちに喜ばれ、工夫しだいで、
一層効果的な指導法として活用し得るものではないかと
考えたからである。

考察にあたっては、次に示す三つの仮説を立てた。

① 「読み聞かせ」を国語科読書指導法の一つとして

とらえることにより、国語科教育における読書指導
法の充実と発展を期することができるのではないか。

② 「読み聞かせ」は、「聞くこと」の学習だけでなく、「話すこと」の学習としても活用できるのではないか。

③ 「読み聞かせ」は、幼児や小学校低学年の児童以
外にも、指導対象の範囲を広げることができるので
はないか。

仮説①については、これまで図書館教育という分野に
おいて、読書への興味づけとして重視され、効果をあげ
てきた読み聞かせを、国語科の読書指導法として位置付
けていったらどうかということである。国語科教育にお
ける読書指導の充実を図るとき、読書への興味づけとし
て有効な手段である「読み聞かせ」を、学習指導に取り
入れていくことは意義あることと考えられる。

仮説②はその音声言語に注目した仮説である。

「読み聞かせ」によって、聞き取りの能力を養うこと
ができるが、単に物語のあらましを聞き取らせるとい
う指導だけでなく、音声言語を耳での確に聞き取って理解
するという学習にも、大いに活用できる。例えば単純な
あらすじの本を選んで読み聞かせをした後、話のあらす
じに関する質問をすることで、内容を聞き取る能力や集

中力をとらえたり、話の内容をクイズのようにして、聞き手に投げ掛けるなどの工夫により、聞き取りの能力を高めることもできるのではないだろうか。「書く」「読む」に比べて、「聞く」ことの学習は通常の授業の中ではあまり重視されていない。「聞く」ことの学習を授業に位置付けるのは困難が多いが、「読み聞かせ」を利用することで、話し合いの場面でしか問題にされなかった「人の話を聞いて内容を理解する」ことの学習を、意図的・計画的に行なえるようになるのではないだろうか。こうした実践的工夫を積み重ねることにより、「読み聞かせ」を通して、聞き取りの能力を養うことが可能であると考えられる。

また、「読み聞かせ」の持つ魅力は、他人の読んでくれる音声言語を聞いて作品を楽しむところにあると言っているだろう。しかし、その作品自体を楽しむことと他に、読み手の発した音声言語そのものを楽しむこともできる。読み手である教師の感情を込めた読み方は、子ども達の心に直接響き、話の中に出てくることばの繰り返しやリズムカルなことばを、より楽しく伝えることができる。子ども達は楽しいことばの繰り返しなどを、教師の読み方を真似て、口に出して繰り返ししてみたりする。特に昔話のようなものには、方言や独特の言葉遣いがある。子ども達は普段耳慣れない言葉の響きに興味を示すものである。教師の読み方は、そのまま子ども達

の読み方のお手本になる。つまり、言葉の発音、アクセント、間の取り方、感情を込めたせりふの言い方など、全てそれらは子ども達の音読や朗読、さらには話し方の模範とならないものはない。そう考えると「読み聞かせ」によって「話すこと」の学習指導もまた可能であると考えられる。聞いて理解することだけでなく、耳から入った言葉を主体的に繰り返しすることで、豊かな表現力を養うものとなるのではないだろうか。

従来「読み聞かせ」は、教師または親が子どもに読んでやるという、「大人から子どもへ」の形が一般的であった。そしてその対象は「幼児または小学校の低学年」という狭い枠の中でとらえられてきた。しかし「読み聞かせ」は、必ずしも「大人から子どもへ」という形をとらなければならぬものではないと考え、「読み聞かせ」の対象はより範囲を広げることができる。つまり、子どもが大人に読んで聞かせてもいいし、子どもが子どもにという形でもいいのではないだろうか。国語の教科書をみんなの前で音読や朗読するのは違い、読み聞かせる本は、読み手自身が相手に読んで聞かせたい本であることが不可欠の条件といえる。そのように考えれば、台所で夕飯の準備をしている母親の背中に向かって、子どもが本を読んで聞かせるのも、「読み聞かせ」と言えるし、児童生徒が教師に「このお話を聞いてもらいたい。」と思って読むのも、「読み聞かせ」と言えよう。また教

師に対してのみが読むのではなく、先生や友達みんなに読んで聞かせることもよい。読み手を大人と限定せず、子どもに声を出して他人に本を読み聞かせるという経験をさせることによって、一層「読むこと」の学習を充実させることができる。このように、従来「読み聞かせ」の対象として考えられてきた「幼児・小学校低学年」に限らず、あらゆる発達段階において、「読み聞かせ」の有効性を活用することが可能であると考えられる。仮説③は、このような考えによるものである。

以上のような仮説に立って、「読み聞かせ」を取り上げたのであるが、それ以外にも考察にあたっては、次のような方法的利点にも考慮した。

一つは、「読み聞かせ」は、誰にでも容易にできる読書指導の方法であり、いつでもどこでも、読むための本があれば実に手軽に、短時間でできるということである。

今一つは、「読み聞かせ」は子どもから非常に喜ばれるということである。教育実習中小学校一年生のクラスで、絵本の「読み聞かせ」を始めた途端に騒がしかった教室が静かになり、子ども達みんなが絵本に視線を集中させたという経験がある。そのとき、これほどまでに子どもの心を引き付ける「読み聞かせ」の魅力を、効果的に国語教育の中に活かしていくことができないものかと考えた。

三、「読み聞かせ」の利点と問題点

繰り返しになるが、「読み聞かせ」は、絵本や児童書への興味付け、読書への興味付けとしての働きを持つものとしてとらえられることが一般的であり、他の効用や機能についてはあまり注目されてこなかったようである。しかし、前節の考察からもわかるようにもっと多くの利点が考えられるのではないだろうか。今、「読書」と「読み聞かせ」とを比較するとき、次のような「読み聞かせ」の利点が考えられる。

① 字が読めない子どもや読書能力が充分でない子どもに、本の世界の楽しさを紹介することができる。

② 子どもに新しい領域の本や良書と出会う機会を与えることができる。

③ 複数の聞き手が、同時に同じ作品を味わうことができ、共通の間接的体験をすることで、集団意識を高めることができる。一つのことについて話し合う場を容易に作るができる。

④ 読み手によって発せられた音声言語を耳で聞くことによって、目で活字を読むのとは違った、言語に対する鋭い感覚や集中力・聞き取る姿勢を養うことができる。

こうした「読み聞かせ」の利点は、今後国語教育に取り入れるにあたって大いに活用されるべきであろう。し

かし一方で、「読み聞かせ」を国語教育に取り入れていく上で、注意しなければならない問題点もいくつかあると考えられる。それは次のようにまとめられる。

① 活字を自分の目で追って読むという大変な努力のいる作業を必要とせず、聞いていれればいいと思いつき、受動的な活動となってしまう恐れがある。

② 読み手の作品理解や音声化の仕方によって、内容理解が大きく左右される。

③ 文章を理解し味わう速さは個人によって差があるが、読み聞かせは同一の速さで進められるため、個人の作品理解の深さに差を生じやすい。

④ 音声は消えてしまうので、前に戻って読み味わったり、繰り返して読んだりすることのよさが失われる。

このような問題点をも認識した上で、「読み聞かせ」の持つ利点を有効に活用すれば、ことばの力をつけることは可能であると考えている。

四、「読み聞かせ」を取り入れた

実践例についての考察

教育実習以外では、実践経験が乏しく、自ら先の仮説を検証する機会を持たないので、ここでは、県内を中心とした先輩の実践例を取り上げ、考察の対象とすることにした。全ての仮説を証明し得るような実践例を捜すことはできなかったが、仮説を実証する手がかりとなり得

るいくつかの実践例には出会うことができた。ただ、それらは「読み聞かせ」を国語科の学習として位置付けたものはまれで、ほとんどが図書館教育として行なわれているものであった。しかし、図書館教育という分野での実践例であっても、活用の仕方によっては国語科の中の読書指導として十分位置付けられるように思う。

以下、松本市立旭町小学校における『図書館教育指導案』（平成三年十月十八日長野県図書館教育大会資料・旭町小学校編）の中から、低学年における実践記録を中心として、考察を行なうことにする。

本稿では紙幅の関係で、実践例を取り上げていく中で、気付いたことや重要だと思われること、「読み聞かせ」によってつけられる力などについて、考察の結果重要と思われるものを次に挙げておく。

○ 読み聞かせの途中または終わりに、教師が本の内容にかかわる問いを投げかけることによって、イメージをふくらませながら聞いたり、より深く読み味わったりすることができる。また読む前に題名から本の内容を想像させることによって、より興味を持って聞こうとするようになる。

○ お話を聞くだけでなく挿し絵を見て、イメージをふくらませたり、挿し絵そのものを楽しんだりしている。
○ 子どもはおもしろいことばの響きや、言い回しのおもしろさに敏感に反応しているということから、読み

聞かせる際に、特に擬声語・擬態語などの読み方には、注意する必要があると思われる。

○「読み聞かせ」と並行して、登場人物と同じ経験をしてみることで、主人公の心理をより身近に感じたり、理解したりできる。

○「読み聞かせ」とあわせて、関連する図書を紹介することによって、他の分野の読書への興味付けをすることができると考えられる。「読み聞かせ」が読書への橋渡しとなると言える。

○「読み聞かせ」の後、「自分の好きなところの絵を描く」という活動を取り入れることによって、自分の中にお話の世界を、より明確にイメージすることがねらえる。好きなところの絵を描いてみるのに、主人公の視点で物事をとらえるということは、登場人物の気持ちを考えるだけでなく、お話の世界に入り込んで、主人公になりきってしまうということである。

○耳から聞いた登場人物の動きなどを、自分で実際に動作に表してみるということは、非常に難しい作業であると思われる。聞き取ってその内容を理解する能力と、それを表現する能力が必要となる。このことから、「読み聞かせ」から表現の学習へ、結びつけることができるのではないかと考えられる。

○子どもたちは、耳から入ったことばのリズムや響き、言い回しのおもしろさを、今度は自分で音声化すると

いうことを楽しんでいる。このことは、「読み聞かせ」が単なるお話を聞いてその内容を楽しむということだけでなく、耳から入った音声言語を、自分で繰り返し口にするということをするきっかけになっているといえる。

○「読み聞かせ」のあと話し合いを取り入れることによって、他人の意見や感想を聞き、自分の中に描いていたお話の世界がより明確になり、広がりを持つのではないだろうか。また、いろいろなとらえ方を知り、幅広い読みの力を伸ばすことができると考えられる。

○「読み聞かせ」を話の途中までして、その続きを創作するという活動を取り入れることによって、豊かな想像力を養うことができる。また、お話の途中までに出てきたことばや、表現を真似たり、自分のイメージを文章に表したりすることで、表現力を豊かにすることがねらえると考えられる。

○一つのテーマでさまざまなジャンルの本を読み聞かせることで、テーマに関する知識やイメージをさまざまな角度からとらえることができる。また読んでもらいたい本を、聞き手が選択するという作業の中で、あるテーマを設けて、図書を選択させることで、図書選択能力を養うことができる。

○「読み聞かせ」によって広がったイメージの世界を文章に表現することで、お話の世界がより明確になると

考えられる。耳から入ったことばを思い出しながら、自分の感想などを文字にして表現するという作業によって、豊かな表現力をつけることができるのではないか。

これらの考察から、「読み聞かせ」は、単に読書への興味付けという従来の固定的な指導目的に限らず、国語教育でねらいとする「国語の力」をさまざまな角度から身につけることに役立つのではないかと考えられる。

次に「読み聞かせ」によって指導できる事柄について、述べてみる。

五、「読み聞かせ」によって指導できる事柄

「読み聞かせ」によって指導できる事柄として、蔵元和子氏は論考「読み聞かせを指導方法の一つと考えて各学年のねらいをもって行う」『月刊国語教育研究』一九九〇年八月号)の中で、指導できる事柄を次のように挙げている。

① 本に対する興味・関心をもたせ、読もうとする意欲を起こさせる。

② 読書の基礎的な能力を養う。

・理解できることばを増やす。

・豊かなイメージをもつ力を育てる。これは特に絵本の読み聞かせによるところが大きい。

・話の筋を追う力⇨連続的なイメージを描いていく力

を育てる。連続的なイメージを描くためには、要点をおさえていくことと、聞き取ったことから次の場面を推理していく力が必要である。

・話の筋をまとめる力を育てる。

話の筋を追ったりまとめたりする力は、集中して言葉を聞くことにより育てられる。従って、テレビや絵本などの様に一度に様々なものが脳に流れ込むようなものでは育ちにくく、話の起承転結がはっきりしている昔話のようなものの語り聞かせや読み聞かせが必要である。

③ 豊かに感じることでできる心を育てる。

・教師との感動の共有から(主に低学年)

大人と一緒に感動しながら理解できる言葉を増やし、言葉のイメージをはっきりさせるとともに、感動したことを確かめる。

・友達との感動の共有から(主に高学年)

一冊の本について、友達の考えや感動を知り、自分の読みを深める。又、お互いの考えや個性を認め、大切にすることを育てる。

④ 良書や適書を選択する力を養う。

良書の選択眼は、読書能力の総合的なものであるが、単にたくさん読むことだけでは育たない。「読み聞かせ」による良書との出会いや感動のふれあいが大切である。

蔵元氏は「読み聞かせ」を単に「読書の興味づけ」と

してではなく、読みの力を育てるための指導方法として各学年に位置付けることを試みているが、氏の言うように、「読み聞かせ」によって様々な力が先の仮説のようにねらえるとすれば、これまで強調されてきた「読書の興味づけ」としての効果だけでなく、「読み聞かせ」のもつ効果は、実に広い範囲に広がっていくことになる。

国語教育という総合的な視野に立つとき、「読み聞かせ」の効果は、読むことの学習だけではなく、聞くこと、書くこと、話す力ことの学習にも及んでくる。なぜなら、「読み聞かせ」は、ことばの学習の様々な要素を含んでいるからである。そこで蔵元氏の挙げる「読み聞かせによって指導できる事柄」に、次のようなことも加えることができるよう。

○聞き取りの能力をつけることができる。

・話を順序立てて聞き取り、耳からのことばによって話を理解する力をつけることができる。

○音声言語に対する鋭い感覚を育て、話すときの間の取り方や、正しいことばのアクセント・発音など、話しことばに関する基本的な事柄を身につけることができる。

○豊かな表現力をつけることができる。

・文章をまとめる力、筋道の立った文を書く力、豊かな語彙力などの文章表現力のみでなく、表情や身体

表現なども豊かにすることができる。

このように「読み聞かせ」には工夫によって、実に多くの事柄の指導が可能と考えられる。では、「読み聞かせ」をより有効な指導方法としていくためには、どのような工夫が必要であろうか。

六、「読み聞かせ」を有効に活用するための工夫

「読み聞かせ」を単なる「お話を聞くこと」に終わらせないためには、「読み聞かせ」によってつけさせたい力、つまり指導目標を明確化する必要がある。今後は筆者自身実践の中で、これまで、お話を聞いて楽しむ、読書に興味を持たせるといった目的のためにのみ用いられてきた「読み聞かせ」を、国語科の最大の目標である「ことばの力をつける」という観点から、見直してみようと考えている。

筆者は今年度初めて教師として学校現場に臨み、小学校の特殊学級の担任をすることが決まっている。四年生から六年生までの児童三人を受け持つことになっているが、知恵遅れの子どもたちは、ことばの発達にも遅れがあることが多い。「読み聞かせ」が全ての言語活動、学習にかかわってくるものであれば、この三人の児童に基本的なことばの力を身につけさせる上で、有効な方法になりうるのではないかと考えている。

例えば、簡単なあらすじの絵本を選んで「読み聞かせ」

をした後、次のような指導を取り入れてみようと考えている。

- ・話の内容についての質問をする。(「誰が出てきましたか。」「何をしましたか。」など)
- ・難しい単語について、実物を見せたり実際に動作してみせたりして説明する。
- ・話の途中まで聞かせ、話の続きを想像させる。
- ・話の内容にあったいくつかの絵を用意しておき、話の展開にそって並び替えさせ、それぞれの場面について話をさせる。
- ・それを文章に書かせる。
- ・子どもに本を読ませる。(「読み聞かせ」の読み手をさせる。)
- ・紙人形などで、劇をさせる。

こうした活動を取り入れることで、ことばの総合的な力を養うことができると考えている。「読み聞かせ」は「耳からの読書」といわれるように、児童は聴覚から入った音声言語によって、話の内容を理解する。しかし、単に「聞く」だけでは、集中力に欠け言語能力の低い子どもは、話の内容を本当に理解したのか、また正しく聞き取れたのかどうかはわかりにくい。質問をしたり、あらすじを話させたりすることで、聞き取りの能力を高めることができるのではないだろうか。

聴覚からの音声言語を、いったん文字言語に置き換え、それをまた音声化するなど、聞く・話す・読む・書くの四つの活動を取り入れ、有機的に関連づけていく工夫をしてみようと思っている。

その際重要なことは、指導内容・指導目標などは、あくまでも学習者の興味、関心、能力等に応じたものであるべきだということであろう。特に特殊学級の子どもたちは、それぞれ能力の差が大きく、興味関心のばらつきも大きいであろうと思われる。むろん特殊教育の場に限らず、一人一人の言語発達の程度を把握し、個人の能力にあった指導をすることは当然のことではあるが、特殊学級においては、それが一層増幅された形で迫ってくることは明白であり、最大の留意点であろう。

また、「読み聞かせ」によってことばの力をつけることのほかに、豊かな情緒を養ったり、間接的にさまざまな経験を味わわせたりすることができるなど、一般の読書と同じ事柄をも指導することができよう。知恵遅れの子どもにも多く見られる情緒面の不安定を、「読み聞かせ」によって少しでも減少させることができるとも考えている。

「読み聞かせ」を「読書への興味付け」という従来の固定的な目標の置き方から脱却させ、国語科の学習の一つの方法として考えてみてはどうだろうか。先に述べたような工夫によって、指導対象の範囲をより広くするこ

とができ、総合的なことばの学習として国語科教育の中に取り入れていくことができると考えられる。いずれにしても、筆者自身、今後特殊学級担任として、実際に「読み聞かせ」を実践する中で、より深く研究していきたいと考えている。

付記 この論稿は、卒業論文をもとに執筆したものである。

(ひらさわ まみ 木曽郡木祖村立木祖小学校教諭)